



こんな映画を観てきた

### 合併結婚

1968 米

監督:メルビル・シェイブルソン

★ルシル・ボール

★ヘンリー・フォンダ

「ささやかなきめごとと、お互い文句を言わない…」これこそが、何事につけ“円満”の秘訣だそう、それにしてもそれぞれ8人と、10人の子を持つ者が結婚すると、どうなるか？

昭和の“沁みる”唄

### 流行歌はやりうた

作詞:なかにし 礼

作曲:四方 章人

唄:森田 由美恵

雨にぬれ 街を歩けば  
人の世の 掬がしみる  
何も無い 心の中に  
消え去った 夢を浮かべて  
流行歌を 流行歌を  
ひとりで歌う

10.June.2021

Vol.25

お楽しみはこれからだ 6月は『紫陽花』

# YAH!

ヤー！ YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

## 『合併結婚』 こんな映画を観てきたー(1968米/YOURS, MINE AND OURS)

「ルーシー・ショー」でおなじみのルシル・ボールと、「怒りの葡萄」「ミスタア・ロバーツ」のヘンリー・フォンダという異色の取り合わせといっているのだから、テレビ放映の微かな記憶があるだけで、実話に基づいたホームドラマ…だというのが、そんなことはどうでもよろしい、「ささやかな規則があって、お互い文句を言わないこと、それが、困難を乗り越えられる手立てだ」という台詞だけが正確ではない(どちらが言ったのかも覚えていない)が、心に残っている。そうしたうえで、最悪の事態に備えて、基本的には楽観的に生きるということか、解らないでもないが…

資料によると、海軍に勤めていた夫が死んだので、ヘレン・ノース(ルシル・ボール)は、夫の思い出のない所で新

しい生活を始めようと思い、残された8人の子供とともにサンリアンドロに向かった。一方、原子力空母エンタープライズの乗組員のピアズレイ(ヘンリー・フォンダ)は、妻に先立たれ、これまた10人の子供の面倒を見なければならなくなり、空母を下り陸上勤務に変わった。この二人という二組が結婚、これがまさに“合併”ということなのだろう、当然様々な問題が起こるわけで(だから映画になる…)、結論からいうと、いかにもアメリカ映画的にハッピーエンド、つまりは困難を乗り越えていった…というもの、「ささやかな規則」と“懐深い許し(寛容とでもいって可うか…)”、これさえあればなんでも上手くいく…はずだという作品であった。

## もう止しにしましょう！ 東京オリンピックの行方

「もう止しにしましょう」というと、「そんな単純なことではないんですよ」と返ってくるのだから。そんなことは端からわかっている、じゃあこれまで随分と時間もあっつらうに、後手後手にしか外的外れでその場しのぎの対応を繰り返してきたつけがまわってきて、やがて期限が迫るに及んで、とどのつまり二進も三進もいかないことになってしまった…ということだろう。

経済、政治、文化の上に“社会”というものがあるとすれば、全てが不都合であれば論外だが、それらのうちのどれか、或いはどれかとどれかが問題ありで足を引っ張っているというのであれば、そもそも何を、どのような状況をよしとして評価す

るのか、バランスを考えれば、おのずと答えが明確になるか、もしくは方向性は定まるはずである。要は、バランスのとれた、しかもそれぞれが満点に近い対応こそがベストであることは当然だが、二番手、三番手を予め想定準備しておいて、よりベターを目指すことが常道なのだと思う。

落とすところは難しいかもしれないが、ここはやはり、「もう止しにしましょう」に至るしかないのだから…、それこそが常識的なライン、大半(過半数ではまだ弱い)の腑に落ちる結論なのだろうし、民主主義というものだ。